愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 12 号
2011.5
63-74p.

瀬戸市上品野町菩提寺の調査

伊奈和彦 *・鵜飼雅弘 *
宇佐見守 *・蔭山誠一
武部真木
*　愛知県埋蔵文化財調査センター

本センターでは、平成 16、19、20、21 年度と 4 次にわたって瀬戸市上品野町にある桑下城跡の発掘調査を行ってきた。桑下城跡の北、直線距離にして 300m 程の位置に寂場山菩提寺が存在する。近接して存在する城や窯と寺院とには何らかの関連があるのか。今回我々はこの疑問と興味とから菩提寺について考察することにした。寂場山菩提寺は寺伝によれば天平年間に行基が開いたとされているが、現在は無住の寺となっており、創建当初とはかなり様相を異にしているようである。不明な点の多い菩提寺の近世以前の姿を探るために現地踏査を実施し、文献資料や地元住民からの聞き取りによってさまざまな角度から考察を行った。その結果、文献からは慶長年間以前にこの場に菩提寺ないし観音堂が存在していたことがわかった。また採集遺物では、中世前半期と後半期の 2 時期に大別することができ、少なくとも中世後半には何らかの宗教的な施設が存在していたであろうとの推定に至った。

はじめに

寂場山菩提寺は瀬戸市上品野町にある天台宗の寺院で、かつては一大霊場であったとの記述も見られ、寺域も広かったと考えられる。しかし、寺に関する文献資料は乏しく、しかも曖昧で矛盾点も多い。更に昭和四（1929）年に本堂が焼失しており、無住の寺となって久しい *。数人の地元住民に聞き取りを行ったが、近世以前の姿を伝えるような話は聞けなかった。

かつて瀬戸市教育委員会が「菩提寺遺跡」として遺跡分布調査を行っており、回廊状の平坦面と集石を確認。四耳壺や常滑の壺の破片などを採集して、中世墓群の可能性を指摘している。

今回の我々の調査は、考古学的な手法を用いて寺域と遺構・遺物を探るとともに、文献を精査し、聞き取りによってこれを補完・修正することで不明な点が多いかつての菩提寺の姿を少しでも明らかにすることが目標である。また、当センターが年次を追って調査してきた桑下城跡や周辺の遺跡・窯跡との関係も探ってみたい。（伊奈和彦）

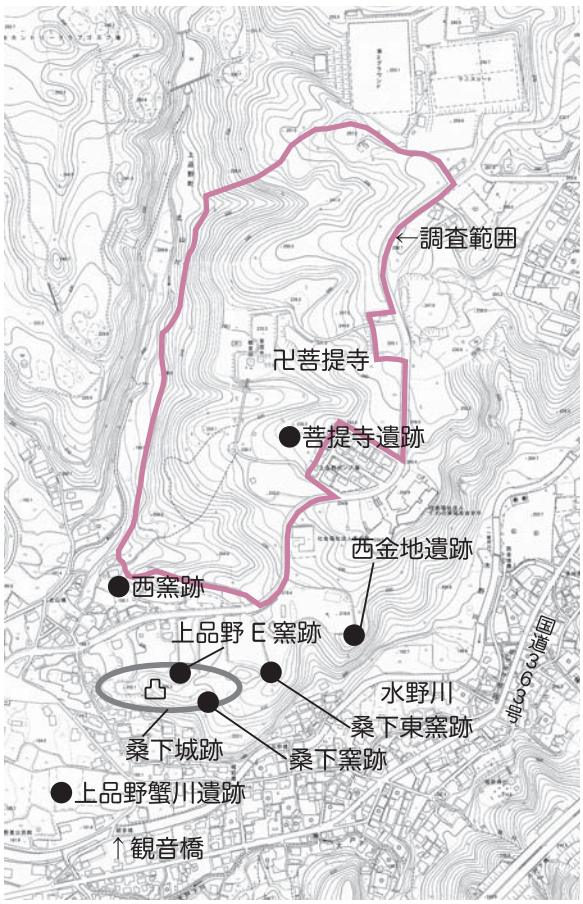

図 1　菩提寺周辺の遺跡 (1:10000)

* 現本堂は昭和三十六（1961）年の再建であり、境内は再建後の整備により大幅に改変されているようである。現住職は春日井市白山町の天台宗円福寺の係累の方で、管理は地域住民で行っている。ちなみに、檀家はいないとのことである。

菩提寺について

（1）菩提寺に関する文献記録

菩提寺は天平年間（8世紀半ば）行基が刻んだ本尊を寂場山に安置したのを始まりとし、その後澄照が鳳来寺末刹として堂塔庫裏を修理したとある（『張州雑志』）。また参道の傍らには養和元（1181）年に没した東照上人が開基したとする石碑が立ち、大正六（1918）年に編まれた「本尊年代由緒調」では、弘治元（1555）年養海が中興したと記されている（『瀬戸市史通史編上』）。いずれも伝承の域を出ず、開山・中興の時期はおろか、東照・養海の経歴も不明である。

尾張藩の地誌『寛文村々覚書』（以下『覚書』と記す）によれば、菩提寺は春日井郡吉根村（現名古屋市守山区）竜泉寺末とあり、寺内六畝歩は「備前検除」と記されている。「備前検」とは慶長十三（1608）年尾張藩で実施された伊奈備前守による検地をさす。また『張州雑志』の記述は、菩提寺の竜泉寺への帰属を慶長年間とするが、『覚書』の内容とは矛盾しない。これらのことから、菩提寺は慶長年間までに成立し、竜泉寺末となった可能性が高い。

また『覚書』には菩提寺「持分」として、観音堂が地内七町五反歩を「前々除」されているが、菩提寺との関連を示す記述はない。その後『尾張徇行記』（以下『徇行記』と記す）では『覚書』の内容に加え、当寺書上として、観音堂が「漸々ニ破壊セシニヨリ、今ハタゝミ堂ニナリ、本尊ハ当寺ニ安置ス」と記されている。両書の記述には約150年の開きがあり、この間に観音堂が衰微し、菩提寺の管理下に置かれたことがわかる。

菩提寺周辺の景観については、寛政四（1792）年閏二月に作成された「春日井郡上品野村絵図」（財団法人徳川黎明会所蔵、『瀬戸市史　資料編一　村絵図』所収）が参考となる。この絵図には道路・河川・ため池・家屋・寺社・田畑・他村の飛地・見取所などが描かれ、主な山や川の名称も記されている。菩提寺をみると、本堂および仁王門は描かれているものの、観音堂は描かれていない。また仁王門の隣に天神が描かれていることに注意が向く。寺周辺に目を転じると、四ツ辻御林に至る道の分岐点に松が描かれ、「せう人古塚」（上人古塚）と記されている。水野川北岸には桑下城跡を示す「寺やしき」「城根」「場々やしき」「中やしき」が連なり、「寺やしき」には「今ハ修験居住仕候」と記されている。（鵜飼雅弘）

（2）菩提寺の文化財（建物、祠、仏像、石碑など）

残念ながら現存する近世以前の文化財は僅かである。行基によって刻まれたとされる本尊の千手観音像や、これと一緒に本堂に安置されていたという不動明王、毘沙門天、弘法大師、役の行者の各像は、昭和四（1929）年に起きたとされる火災によって本堂と共に焼失している。現在の本堂、恵比須堂、庫裏は昭和三十六（1961）年に、仁王門は平成十五（2003）年に再建されたとのことである（写真1）。ちなみに本尊なども新調されている。仁王門については焼失したのではなく、老朽化のために建て替えたそうであるが、この建て替え時に、門の両脇に安置されている仁王像の作者と制作年を示す板が見つかっている。板には、「寶永二年六月　□□大仏師　森」と墨書されていたとのことである*。ただし、残念ながら仁王像は、仁王門建て替え以降のある時期にペンキで彩色されてしまったそうである（写真2）。

現在は失われてしまったが、本堂西側の平場には庫裏が建っていたそうである。実際に目にしたことのある現住職によると、現本堂よりも大きく立派な建物であったが、昭和三十四（1959）年九月の伊勢湾台風で大きな被害を受け、その後撤去してしまったとのことであった。

現在、境内において目にできるものは、弁財天や大黒天、不動明王を祀った小祠、現菩提寺で最も盛大な行事となっている「初えびす」にまつわる「えびす神」勧請の石碑**、台座に番号の刻まれた地蔵***や、元は村の辻などに置かれていたと思われる馬頭観音などの石仏などであるが、どれも近世末から近現代のものと考

* 宝永二年は西暦1705年にあたる。
** 正面に「出雲両福神奉安」、向かって左側面に「現住職　寛順代」、右側面に「大正十五年二月勧請　堂昭和二年二月建之」と刻まれている。
*** 弘法大師信仰によって置かれたものか。

えられる*。

また、次項で触れる仁王門尾根の平場５には、墓石や五輪塔、宝篋印塔などが並べられている。五輪塔や宝篋印塔は、それぞれ部分的に異なった部材が組み合わされており、いつの頃か崩れたものを適当に積み上げたのだろう（写真3・写真4）。形式からすると近世・近代のものではなく、戦国期以前、中世まで遡ることができると考えられる。現場の状況から判断すると、これらが当初からこの場所にあったとは考えられないが、瀬戸市教育委員会が中世墓群の存在の可能性を指摘している「菩提寺遺跡」では五輪塔の上部（空輪と風輪部）が見つかっている。よって平場５にある五輪塔や宝篋印塔は、境内地にあったものである可能性が高いのではないだろうか。

墓石は歴代住職のものと思われる。それぞれに刻まれた文字を年代の古い順に挙げる。

墓石①：正面「月山元□信」　向かって右側面「明和八年□□」　左側面「□十二□日」（明和八年は 1771 年）

墓石②：正面「阿闍梨□國和尚」　向かって右側面「安永五年」（安永五年は 1777 年）

墓石③：正面「中興大阿闍梨本覚大和尚」　裏面「文政十一年」（文政十一年は 1828 年）

石碑　：正面「金剛佛子巧海」　向かって右側面「慶應紀元丑十月十有一日」（慶應丑年は 1865 年）

* 昭和五年頃に瀬戸市史編纂準備委員だった加藤庄三氏により、「明暦四歳戊戌六月吉日　下品野　村上善九郎」と刻まれた手洗石があったことが確認されている。（安藤政二郎 1956 『改訂増補　瀬戸ところどころ今昔物語』 大瀬戸新聞社）

写真１　平場１にある菩提寺本堂、庫裏、恵比須堂

写真２　菩提寺仁王像

写真３　平場５にある宝篋印塔

写真４　平場５にある五輪塔

なお、瀬戸市が作成した都市計画図には「観音坊」という表記が見られるが、聞き取りを行った地元住民や現住職は、聞いたことがないとのことだった。また、前出の『覚書』や『徇行記』には、「観音堂」との記述がみられるが、「観音堂」という名は「観音坊」同様聞いたことがないとのことだった。（伊奈和彦）

旧境内の考古学的調査

（1）調査の方法

旧境内遺構の分布調査を行うため、寺域と考えられる範囲を4人で4日間にわたって踏査した。確認した平場は、長軸・短軸の長さを計測して、遺構や採集した遺物も含めて1／2,500の都市計画図に記録した。各平場と遺物採集地点にはそれぞれ番号を振った（図2・表1）。　また、ポイントとなると思われる地点や、遺構、遺物は極力写真撮影をした。

（2）平場や遺構の概要

菩提寺の境内範囲をどこまでと考えるか。前出の寛政四（1792）年作成『村絵図』には、「山六町歩　東西百廿間　南北百八十間　松柴立平山　是ハ菩提寺と申天台宗扣」と記されている。六町歩は約6万㎡、百廿間は約220 m、百八十間は約330 mということになるが、我々は近世以前、おそらく中世には存在したであろう菩提寺の姿を明らかにしたいと考えているので、この記述よりも広い範囲を踏査することにした。具体的には東西300 m、南北600 mを調査範囲とした。地形は、東西方向に延びる尾根と谷が南北に連続しており、西には北山川が北から南へと流れている。調査範囲が広いので、便宜上、菩提寺北地区、菩提寺地区、菩提寺南地区の3地区に分け、更に6つの尾根と5つの谷にそれぞれ名前をつけた（図2・表1）。

以下、調査の概要を報告する。

ア　菩提寺北地区

北A尾根・北B尾根　雑木林内に若干の平場が確認できたが、いずれも近現代の造成のようである。地形などから判断して、旧境内地とは考えられない。

北B東西谷　菩提寺本堂の裏手に当たる。以前は沢であったが、10年程前に埋め立てられたそうで、大規模な造成がなされている。

イ　菩提寺地区

観音坊尾根

平場1は、東西50 m、南北37.5 mを測り、菩提寺の平場の中で最大の面積を有する。再建された本堂と恵比須堂、これに挟まれて庫裏が建っている。現本堂の基壇には一部被熱痕が見られるので、旧本堂の基壇であったと考えられる。本堂周辺には旧本堂のものと思われる礎石らしき石がいくつか見られる。本堂脇で大窯期初期の重圏皿1点を採集した（図3）。

平場2には、かつては庫裏が建っていたそうだが、前項で記したように伊勢湾台風で被害を受けたために取り壊されたとのことである。この庫裏がいつごろ建てられたものであったかは不明であるが、1949年米軍撮影の航空写真には建物が写っており、この時点では存在していたことがわかる。礎石がないか調べてみたが、落ち葉が厚く堆積していて見つけることができなかった。

平場8、9は、平場1の東側の斜面を上ったところに位置し、平場としては狭いが、前述の不動明王祠が建っており、弘法信仰の地蔵が点在している。御嶽山信仰に関わる石碑もあるが、これは上品野のある家で祀っていたものをここへ移したものだということである。この2つの平場をつなぐ道がふた手に分かれて延びている。西南方向に向かう道は、後述する中央東西谷北斜面にある平場群に続いており、ここにも地蔵が点在することから、弘法信仰による地蔵参拝のための道と考えられる。この地蔵がいつの時代からあるかは定かではないが、菩提寺が天台宗の寺院であることと、地蔵が弘法信仰に基づくものであることを考え合わせれば、明治・大正期、遡っても近世末のものではないかと考える。もう一本の東方向に延びる道の先には、平場は確認できなかったが、尾根が削平されているのかもしれない。

平場26～29は、庫裏のあった平場2の下段に位置し、後述する水田と思われる平場とは離れているので、寺の施設があったとしてもおかしくはない。径30～40 cm程の石が点在している。ただし、この平場に下りるための道は見つからなかった。

観音坊尾根西斜面

平場 30 ～ 32･35 ～ 40 は、水田跡と思われる。地元住民や菩提寺総代太田氏によると、50 年程前までは参道の両側、特に西側は水田が棚田のように北山川まで続いていたとのことである。北山川沿いにも水田がひろがっていて、水田に行くための道もあったそうであるが、その証言通りに水田跡と思われる平場に沿って道を確認した。平場は現在でも水が浮いている。ちなみに、1949 年米軍撮影の航空写真には、北山川沿いに水田と思われる平場の広がりが写っている。

平場 33、34 は、周辺の水田と思われる平場とは性格が異なるようである。平場 33 の東尾根側に、段状に上がる南北幅 3.5 m、東西奥行 3.2 m、深さ 1.6 mの張り出し部分があり、入口痕跡と思われる石材が 3 個ある。その他にも石が何個か見られる。張り出し部分の奥に祠があったか。遺物を採集することはできなかったので年代は特定できないが、境内地に残る数少ない遺構である。

中央東西谷南斜面

平場 6、7 は境内地の中でも大きな平場である。特に平場 6 は東西 34.3 m、南北 15.2 mを測り、斜面を削って造成されているようである。平場の西端には外周に沿って溝があり、石材が集中する地点が 1 ヶ所ある。中世墓とも考えられるが、後述する狛犬形の遺物がこの平場から下へ転落したと考えられることから、かつては社のような施設があったのかもしれない。この東側にある平場 7 も斜面に造成されているように思われる。両平場の南側に沿って道が確認でき、参道につながるようになっている。

平場 19・23 ～ 25 は連なっており、平場 23 北側に斜面を上って仁王門尾根上にある平場へとつながる道を確認した。

平場 67 ～ 69 が東西に連なっており、それぞれ斜面を削って造成されているようである。この平場に沿って道が確認できる。 平場 67 とその北斜面下の沢との間で陶製の動物（狛犬か）の一部と思われる遺物を採集した（採集遺物の項参照）。平場 6 か平場 67 から転落した可能性が高く、平場 6 にあったとすれば、前述の通り、平場 6 の性格を検討するうえでの貴重な手がかりとなるかもしれない。

平場 70 は平場 69 の南東上段に位置し、この平場の南側にも道が確認できる。この道は、前述の平場 6、7 南側の道につながっている。

中央東西谷北斜面

平場 10・13・14 は、前述の平場 8・9 から下る道沿いの平場である。道沿いに地蔵が連なっている。

平場 11 は、平場 10・13・14 の道から少し外れた平場で、溜池が見下ろせる位置にある。溜池の西側に堰が築かれており、そこから谷へと水が流れている。ちなみに、明治十七（1884）年作成の地籍図にもこの溜池は描かれている。この地籍図では、溜池の西側は大部分が田となっている。

平場 41 ～ 66 は、水田跡と思われる。平場 46 東に隣接して湧水点があり、土留めの石積みが見られる。中央東西谷東方にある溜池から流れ込む水と湧水とが合流して沢を形成し、北山川へと流れている。この沢沿いに段々に平場が続いており、尾根側に石積みも見られる。現状は竹林または雑木林となっているが、「水田が棚田のように北山川まで続いていた」との地元住民の証言と合致する。この場所は、前出の地籍図でも大部分が田あるいは荒田となっている。

平場 43 で遺物を採集（図 2 中の③）、平場 60･66 南下の沢でも多くの遺物を採集した（図 2 中の④）。詳細は次項に記すが、鎌倉初期の遺物が採集できたことは、菩提寺の成立年代を検討するうえでの重要な手がかりとなりそうである。沢の最下流で遺物を採集したことから、遺物が上流から流れてきたことは明白であり、この一帯の水田以前の姿がどのようであったか今後の研究課題となる。

中央東西谷谷底

平場 15・16・18 も水田跡と思われる。1949 年米軍撮影の航空写真にも水田と思われる平場の広がりが写っており、前出の地籍図では田となっている。平場 15 は溜池から水が東西に流れており、この沢で遺物を採集した（図 2 中の①）。

また、平場 16 の東尾根側に土留めの石積みを確認した。平場 18 の南側には池があり、池の中には小祠がある。住職の山川氏によれば、

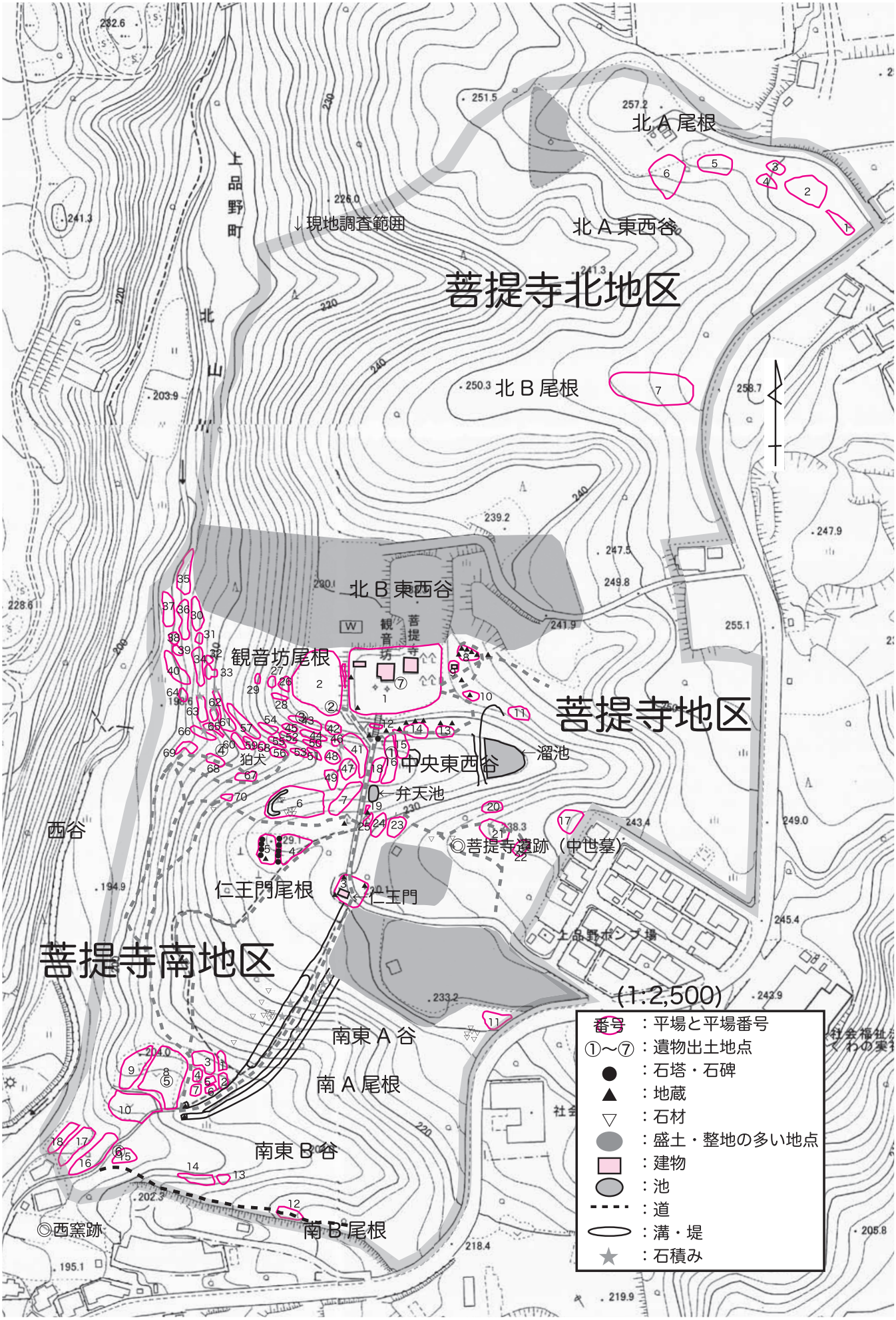

図２　菩提寺付近の平場と遺物採集地点 (1:2500)

表１　菩提寺付近の平場一覧

地区	平場番号	長軸(m)	短軸(m)	平場方向	位置	備考
菩提寺	1	50	37.5	EW	観音坊尾根	観音坊（11.1m×10.9m）、菩提寺本堂
菩提寺	2	37.5	28.2	EW	観音坊尾根	庫裏跡地
菩提寺	3	16	12.1	EW	仁王門尾根	仁王門（6.5m×4.5m）
菩提寺	4	16.2	14.7	EW	仁王門尾根	現代の墓地
菩提寺	5	10.3	8.2	NS	仁王門尾根	寺院中興等石塔あり
菩提寺	6	34.3	15.2	EW	中央東西谷南斜面	西側に溝あり、石材が集中する地点1ヶ所あり
菩提寺	7	27.3	6	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	8	13.1	10.5	EW	観音坊尾根	御嶽山石碑、地蔵16番～19番
菩提寺	9	6	3.2	NS	観音坊尾根	現不動明王祠（昭和61年）、旧出雲両福神奉安石碑（大正4年、覚順）
菩提寺	10	8.9	3.8	EW	中央東西谷北斜面	地蔵13番
菩提寺	11	9.6	4.1	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	12	8.6	2	EW	中央東西谷北斜面	参道奥石階段途中
菩提寺	13	8.4	6	EW	中央東西谷北斜面	地蔵11番・12番
菩提寺	14	12.5	6.7	EW	中央東西谷北斜面	地蔵8番～10番
菩提寺	15	17	8.2	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡、北尾根側に地蔵7番
菩提寺	16	26.5	11.3	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡、北尾根側に地蔵6番、東尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	17	13.8	11.1	NS	仁王門尾根	現代住宅地の西隣接地、新しい造成の可能性あり
菩提寺	18	10	8.4	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	19	7	4.1	NS	中央東西谷南斜面	地蔵5番
菩提寺	20	11.9	6.9	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	21	17.9	12.4	EW	仁王門尾根	
菩提寺	22	8.2	7.8	NS	仁王門尾根	
菩提寺	23	10.4	5.5	NS	中央東西谷南斜面	
菩提寺	24	14.6	8.9	NS	中央東西谷南斜面	
菩提寺	25	6.7	3.1	NS	中央東西谷南斜面	
菩提寺	26	12.6	7.5	NS	観音坊尾根	
菩提寺	27	5.2	3.7	NS	観音坊尾根	
菩提寺	28	9.2	6.4	EW	観音坊尾根	
菩提寺	29	4.6	2.7	NS	観音坊尾根	
菩提寺	30	18.2	6	NS	観音坊尾根	
菩提寺	31	6.3	4.1	NS	観音坊尾根	
菩提寺	32	5.5	2.5	NS	観音坊尾根	
菩提寺	33	6	3.7	NS	観音坊尾根	東尾根側に階段状に上がる南北幅3.5m、東西奥行3.2m、深さ1.6mの張り出し部があり、入口痕跡と思われる石材３個あり
菩提寺	34	22.4	4.9	NS	観音坊尾根	
菩提寺	35	18	6	NS	北谷南西斜面	旧水田跡
菩提寺	36	22.4	6.5	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	37	18.4	9.3	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	38	5.3	3.8	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	39	6.4	3.3	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	40	23.8	6.2	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	41	24.3	8.6	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	42	9.5	6.2	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	43	18	5.3	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	44	12.5	2.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	45	7.8	2.1	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	46	4.4	4	EW	中央東西谷北斜面	東に隣接して湧水点あり、土留めの石積みあり
菩提寺	47	9	5.5	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	48	3.8	3.3	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	49	11	6.2	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	50	2.8	2.7	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	51	5.8	2.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	52	7.1	3.3	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	53	6.3	2.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	54	10.6	4	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	55	6.6	1.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	56	10.4	4.5	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	57	29	5	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	58	6	5.5	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	59	6.6	3.8	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	60	10	3.6	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	61	24.3	5.3	NS	中央東西谷北斜面	北尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	62	8.7	3.9	NS	中央東西谷北斜面	北尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	63	14.7	6.1	NS	中央東西谷北斜面	北尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	64	7.5	3	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	65	11	2.4	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	66	12.6	5.1	NS	中央東西谷北斜面	北東尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	67	16.2	6	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	68	8	4.4	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	69	10.6	3.8	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	70	6.4	3.5	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	池	8.4	7.6	NS	中央東西谷谷底	弁天様か天神様の祠が池上にあり
菩提寺北	1	16.8	3	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか？
菩提寺北	2	19.3	18.5	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか？
菩提寺北	3	8.5	5.2	NS	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか？
菩提寺北	4	9.5	7.8	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか？
菩提寺北	5	16	9	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか？
菩提寺北	6	25	19.3	NS	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか？
菩提寺北	7	46.2	17.8	EW	北B尾根	雑木林、現在の幹線道に沿って存在する、新しいか？
菩提寺南	1	10.8	4	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林、肥え溜めあり
菩提寺南	2	10.6	2	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	3	10.9	8.6	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	4	8.1	5.5	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	5	5.5	5.2	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	6	5.5	5.2	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	7	8.1	5	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	8	27.4	24.4	NS	仁王門尾根南斜面	畑地
菩提寺南	9	27.4	8.3	NS	仁王門尾根南斜面	畑地
菩提寺南	10	20.2	13.2	EW	仁王門尾根南斜面	旧畑地
菩提寺南	11	18.4	10	EW	南東A谷南斜面	雑木林、南10mの地点に石材の集積あり
菩提寺南	12	15.4	6.2	EW	南B尾根	旧水田跡か
菩提寺南	13	6	5.4	EW	南東B谷南斜面	旧水田跡か
菩提寺南	14	20.2	4.9	EW	南東B谷南斜面	旧水田跡か
菩提寺南	15	11.7	10	NS	南東B谷南斜面	旧水田跡
菩提寺南	16	25.8	5.5	EW	南東B谷南斜面	竹薮、旧畑地
菩提寺南	17	16	7.2	EW	南東B谷南斜面	竹薮、旧畑地
菩提寺南	18	15.5	11.7	NS	南東B谷南斜面	竹薮、旧畑地

弁財天が祀られているとのことである*。

仁王門尾根

平場3には仁王門が建っている。詳細は前項(菩提寺の文化財）に記したが、仁王門前に地蔵と石碑がある。石碑正面には「立太子禮紀念樹」、向かって左側面には「大正五年□□□」、右側面には建立者名（窯の組合か）が刻まれていて、その両脇に記念樹と思しき木が植わっている。

平場4は、現代の墓地で、その西隣の平場5に石塔や歴代住職の墓などが置かれている。

平場21・22の尾根上西側下に集石を確認し、平場と集石部分を結ぶような道も確認した。過去に瀬戸市教育委員会が調査をした菩提寺遺跡かと思われる。

菩提寺遺跡について、『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』（瀬戸市教育委員会編 1977）で「上品野菩提寺の南側丘陵斜面上に所在する。斜面をカットした回廊状の平坦面があり、集石も一部みられる。四耳壷や常滑の壺の破片がみられる。中世墓群である可能性が高い。」と紹介している。記述中の「回廊状の平坦面」が今回確認した平場と集石部分を結ぶ道だと思われる。

ウ　菩提寺南地区

仁王門尾根南斜面

平場1～7の現状は雑木林であるが、段々になっており、また畝も見られることから畑の跡だと思われる。これらの平場の西側に道があり、平場3と平場8の間で分かれている。右手は現在の墓地へつながる道、左手は北山川沿いの旧水田へとつながる道になっている。旧水田へとつながる道は途中で枝分かれしており、一本は中央東西谷南斜面にある平場6につながっている。平場7の南側、参道の両脇に石積みがされており、それぞれに地蔵が置かれている。かつては山門のような門があったかとも想像できるが遺物は採集できず、想像の域を出ない。

平場8～10は畑地で、現在も耕作されている。平場8で遺物を採集した（図2中の⑤)。遺物の多さから、寺に付随する施設があったとも考えられる。

参道　参道は階段状に石が積まれており、その両脇には排水路が見られるが、東側の排水路は段々に水が流れるように造成された石積みも残っている（写真5)。西側の排水路は不明瞭で、水路を塞ぐよう巨石が見られる。その巨石の位置から3メートル程西側に入ったところに参道と並行して石列が見られる。

南東A谷南斜面

平場11は雑木林で、南10ｍの地点に集石を確認した。造成地が近いが、遺構の可能性もある。

南東B谷南斜面

平場13・14は、水田跡のようで、現在もぬかるんでいる。

平場15も水田跡のようである。遺物を採集した（図2中の⑥)。平場15の南辺を通る道があり、この道が平場12とつながっている。

平場16～18は竹藪で段々になっている。畝も残っており、畑跡かと思われる。（伊奈和彦）

（3）採集遺物（図3）

菩提寺の調査中に地点①～地点⑧の8ヶ所において、中世から近代にかけての遺物を表面採集した。以下地点毎の概要を述べる。

地点①：菩提寺地区中央東西谷谷底参道東水田跡

中世後半期の匣鉢1点、土師器の焙烙らしき破片1点を採集した。

地点②：菩提寺地区観音坊尾根平場2

近世後期の鉄釉土瓶の底部（図3の1）1点

写真5　菩提寺参道

*瀬戸市史編纂委員会　2004『瀬戸市史　民俗調査報告書四　品野地区』では、「弁天社が祀られている」という記述と「天神社が祀られている」いう記述が見られる。

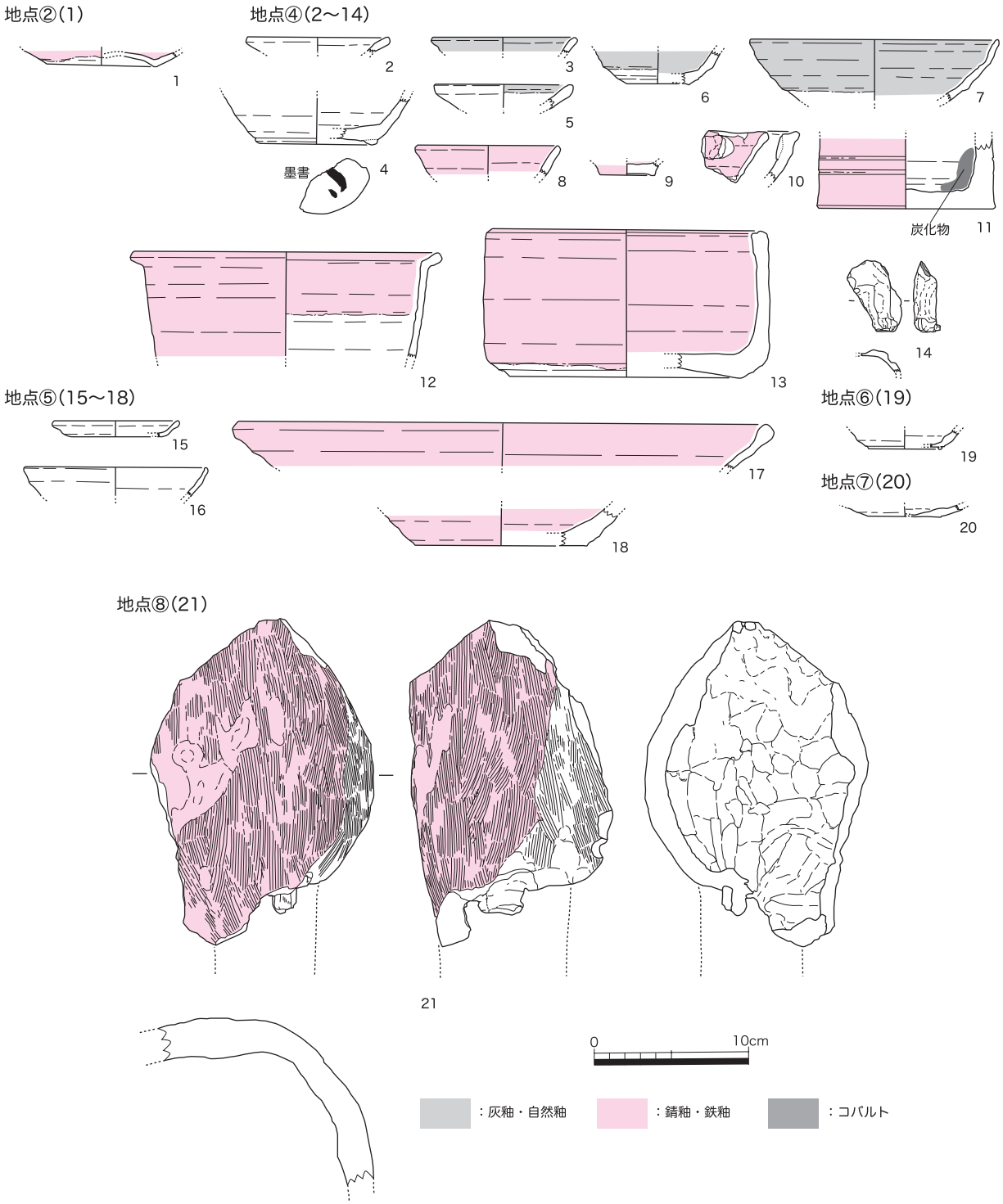
地点②(1)
地点④(2〜14)
1
2
3
4
5
6
7
墨書
8
9
10
炭化物
11
12
13
14
地点⑤(15〜18)
地点⑥(19)
15
16
17
18
19
地点⑦(20)
20
地点⑧(21)
21
0
10cm
：灰釉・自然釉
：錆釉・鉄釉
：コバルト

図３　採集した遺物 (1:4)

を採集した。
地点③：菩提寺地区中央東西谷北斜面平場 43
古瀬戸期の鉄釉壺の破片を 1 点採集した。
地点④：菩提寺地区中央東西谷谷底
尾張型山茶碗の小皿 2 点（図 3 の 2・3）と碗 1 点（図 3 の 4)、があり、碗は藤澤編年の第 5 型式～第 6 型式のものである。古瀬戸後期から大窯期の陶器として縁釉皿 1 点（図 3 の 5)、灰釉丸碗 1 点（図 3 の 6)、灰釉平碗 1 点（図 3 の 7)、錆釉仏供 1 点（図 3 の 8)、天目茶碗の底部（図 3 の 9）1 点、錆釉内耳鍋 1 点（図 3 の 10)、鉄釉平瓶 1 点（図 3 の 11)、鉄釉鉢（図 3 の 12）1 点、匣鉢（図 3 の 13）1 点、錆釉擂鉢 1 点があり、他に近代以後の磁器製動物形の置物（図 3 の 14）1 点があり、最も多くの遺物が採集された。
地点⑤：菩提寺南地区仁王門尾根平場 8（畑地）
尾張型山茶碗 1 点、東濃型山茶碗の小皿 1 点（図 3 の 15）と碗 1 点（図 3 の 16)、古瀬戸後期～大窯期の錆釉擂鉢 1 点（図 3 の 17）と錆釉鍋 1 点（図 3 の 18、釜・土瓶の可能性もあり）があり、比較的多くの遺物が採集できた。14 世紀後半以後の東濃型山茶碗 2 点が採集できた点は、中世前半期において古窯とは関係のない生活関連の遺物として貴重である。
地点⑥：菩提寺南地区南東 B 谷南斜面平場 15 付近（竹薮）
東濃型山茶碗 1 点（図 3 の 19）を採集した。
地点⑦：菩提寺地区観音坊尾根平場 1 観音坊の南東
大窯期初期の重圏皿 1 点（図 3 の 20）を採集した。菩提寺の主要境内にて採集できた遺物として貴重である。
地点⑧：菩提寺地区中央東西谷南斜面
陶製の狛犬か猿形の右胸から右足付根部分の破片 1 点（図 3 の 21）を採集した。全体に刷毛による獣毛の表現があり、前面から側面にかけて錆釉が施されている。この陶器片は比較的大型で、明らかに斜面からの出土であり、平場 6 か平場 67 から転落した破片の可能性が高いものである。

小結

表面採集遺物は中世前半期（12 世紀末～ 13 世紀）と中世後半期（15 世紀～ 16 世紀前半）の大きく 2 時期に分けることができ、他に近世以後の遺物が散見される。また地点⑧で出土した陶製狛犬片のように祠等の存在を推定できる資料もあった。（蔭山誠一）

まとめと今後の課題

（1）調査のまとめ

文献資料に乏しく、残存する遺構も皆無に等しい菩提寺の姿を少しでも明らかにしたいという今回の我々の試みは困難を極めた。しかし、少ない資料をあたり、現地踏査、遺物採集、聞き取り調査を丹念に行うことでお互いを補完し、空白を埋める作業によってある程度その姿を浮かび上がらせることができた。

文献記録からは、慶長年間以前には菩提寺ないしは観音堂が存在していたことがわかった。更に現地踏査によって中世前半期まで遡る生活の痕跡を確認した。現本堂を中心とする菩提寺地区と南側の菩提寺南地区で遺物を採集したことから、菩提寺に関連する建物はこのエリア内にあったと推定できる。特に、中央東西谷を流れる沢沿いで多くの遺物を採集できたので、沢の上流に当たる平場に堂宇が建っていたのかもしれない。現本堂よりも北側の菩提寺北地区では遺物が採集できなかったが、現本堂裏手の谷は大規模な造成によって埋め立てられているため、遺構の有無は確認できない。

ところで、瀬戸市教育委員会が菩提寺遺跡で採集した遺物を確認すると、6 型式後半の尾張型山茶碗 1 点、7 型式の東濃型山茶碗 2 点、同小皿 2 点、古瀬戸前期の四耳壺 10 点、古瀬戸後期の卸目付大皿 1 点、大窯期以降の匣鉢 1 点、常滑産甕 1 点、平瓦 1 点、五輪塔の上部（空輪と風輪部）1 点である（写真 6)。今回我々が現地踏査で採集した遺物の年代と共通している。遺物の性格としては、今回の調査での採集遺物は、中世に遡る生活の営みを感じさせる遺物が含まれており、菩提寺遺跡での採集遺物は墓地の性格を示すものである。

このことからだけでは中世以前に菩提寺ないし観音堂が存在したことは立証できないが、前述したように、菩提寺の平場の中で最大の面積を有する観音坊尾根平場 1 の現本堂脇で大窯

期初期の重圏皿を採集したことは、文献の記述通り16世紀末には観音堂あるいは菩提寺に関連した建物がこの場に存在したことの有力な裏付けとなるだろう。

次に観音堂と菩提寺の関係であるが、文献記録の項でも触れたように、『徇行記』には、観音堂が「漸々ニ破壊」したために本尊が菩提寺に安置されたとの記述がある*。この本尊とは、昭和四（1929）年に焼失した菩提寺本尊の千手観音像を指しているのだろうか。観音堂と菩提寺の関係についての記録はわずかで、詳細を窺い知ることができない。

では、観音堂とは何だったのか。藤木久志氏は、その著書『中世民衆の世界　－　村の生活と掟』の中で、中世には各村で共同管理する惣堂（村堂）が建てられ、村の寄合いや宗教的行事に使われるなど、自立する中世村落（惣村）のシンボル的な役割を果たしたとしている。観音堂とは、まさにこの惣堂ではなかったか。当時の惣堂は、堂守の僧がいるか、行事の都度他寺院から僧を招くかで、管理はあくまで村が行い、村の長老（オトナ）によって差配されたようである。実は、現在の菩提寺も、住職はいるが普段は無住であり、管理は上品野町の住民が行っている。戦前以前からの慣習であるそうだが、6名の役員の中から総代が選ばれ、総代を中心にして行事が執り行われている。まさに中世の形そのものではないだろうか。（伊奈和彦・宇佐見守・蔭山誠一）

（2）今後の課題

考察を進めていく過程でいくつか課題が出てきたので、それを紹介して結びとしたい。

今回の調査では、寺の縁起にある8世紀の創建を示すような痕跡は見つけられず、古代の様子はわからなかった。では、それは全くの伝説に過ぎないのだろうか。菩提寺周辺では近年、当センターの調査などにより古代集落の存在が明らかになりつつある**。特に上品野蟹川遺跡と上品野遺跡では、「山寺」「山」「門」「文室門」などと書かれた墨書土器が出土している。また、桑下城跡では須恵質の瓦塔片（屋蓋部10点）が出土しており、この付近に古代の宗教施設が存在していたことを暗示させる。伝承に基づく菩提寺の創建時期と重なり、興味深い。

*『尾張徇行記』の完成は文政五（1822）年である。

** 上品野遺跡、上品野蟹川遺跡、上品野西金地遺跡、桑下城跡など。

写真6　菩提寺遺跡の採集遺物

次に、採集遺物についてである。現地踏査で採集した遺物は中世前半期（12世紀末～13世紀）と中世後半期（15世紀～16世紀前半）に大別できるが、中世中頃、14世紀の遺物が見つからなかった。これは何を意味するのだろうか。菩提寺ないし観音堂が中世半ばに一度衰えてその後再興されたということか*。あるいは、中世半ばまではこの地は墓域であって、中世後半になってから寺や堂が建立されたと捉えるか。いずれにしても、中世後半以前にこの地で大きな変容があったと想像できる。近隣に古代の宗教施設があったのではないかという推測や、桑下城の築城時期ともからめて考察する必要がありそうである。

菩提寺を考察するうえで、近隣の窯跡との関係も気になるところである。菩提寺近くには複数の窯跡が存在するが、菩提寺境内で採集した遺物の年代と近隣の窯の年代が一致していることに注目したい。それぞれ紹介すると、尾張型山茶碗の窯として上品野E窯跡、古瀬戸後期から大窯期の窯として西窯跡、桑下東窯跡、桑下窯跡があげられる。特に西窯跡は菩提寺の門前に存在し、何らかの関係があってもよいように思われる。

今回の調査によって菩提寺ないし観音堂と桑下城は、16世紀後半の時期に同時に存在して

*　参道の石段下にある東照上人の開基を記した石碑には、弘治元（1555）年に養海が中興したと記されている。

いた可能性が高いことがわかったが、両者の関係については、桑下城の主とされる永井（長江）氏*や、品野城との関係も含めて文献には全く見られない。在地の有力者であったと考えられる永井（長江）氏が菩提寺の保護者だったのではないかと考えてみたが、伝承すら無い状況である。菩提寺と西窯、近隣の他の窯との関係や、桑下城との関係については現在のところ推測の域を出ず、今後の課題となった。

最後に一点、桑下城跡の南側を東西に流れる水野川に架かる観音橋という橋が存在する。桑下城跡に隣接し、城跡南西部に位置するのだが、この橋は菩提寺の参道につながっており、前出の村絵図にもそれと思しき橋が見られる。また、かんのん道という道が中馬街道から菩提寺参道につながる道として存在し*、この道の途中に観音橋があったようである。ちなみにこの道は桑下城跡の西端を通っており、この部分は切通しのようになっている。18世紀末には存在している「かんのん道」や「観音橋」が中世まで遡れるか否か、観音堂との関係も興味深い。この点についても今後の研究に譲ることとする。本稿を参考として更なる調査が広がれば幸いである。（伊奈和彦・宇佐見守）

末筆となったが、本稿の執筆にあたっては、菩提寺住職山川純生氏、菩提寺総代太田錠治氏に多大なるご協力をいただいた。また、菩提寺遺跡やその出土遺物については、財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センターの岡本直久氏にご教示いただいた。紙面を借りて感謝申し上げたい。

* 多くの地誌が松平内膳（正）家老永井民部を城主としているが、長江氏という説もある。（このことは、宇佐見守 2009 「文献資料からみた桑下城と品野城」『研究紀要第10号』 財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター　に詳しい。）

* 瀬戸市史編纂委員会編　1985 『瀬戸市史　資料編一　村絵図』の解説で紹介されている。

引用文献

『尾張徇行記』　1984 『名古屋叢書統編　第五巻　尾張徇行記（2）』愛知県郷土資料刊行会
『寛文村々覚書』 1983 『名古屋叢書統編　第一巻　寛文村々覚書（上）』愛知県郷土資料刊行会
『春日井郡上品野村　地籍字分全図』1885　愛知県公文書館蔵
『張州雑志』　1976 『張州雑志　第十二巻』愛知県郷土資料刊行会
『張州府志』　1974 『張州府志　全』愛知県郷土資料刊行会

参考文献

愛知県史編纂委員会 2007『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』愛知県
安藤政二郎 1956『改訂増補　瀬戸ところどころ今昔物語』大瀬戸新聞社
岩原　剛、野澤則幸、中島啓太 2009「財賀寺旧境内地の調査　－三河における山寺の研究Ⅰ－」『三河考古第20号』三河考古学談話会
宇佐見守 2009「文献資料からみた桑下城と品野城」『研究紀要第10号』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘・早野浩二 2006「上品野西金地遺跡」『年報　平成18年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘・宇佐見守・武部真木 2009「桑下城跡」『年報　平成20年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
川添和暁 2005『上品野遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集）財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
瀬戸市史編纂委員会 1985『瀬戸市史　資料編一　村絵図』愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会 2004『瀬戸市史　民俗調査報告書四　品野地区』愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会 2006『瀬戸市史　民俗編』愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会 2007『瀬戸市史　通史編　上』愛知県瀬戸市
瀬戸市教育委員会 1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』愛知県瀬戸市
武部真木 2008『上品野蟹川遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第142集）財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
武部真木 2011『上品野Ｅ窯跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第170集）財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
藤木久志 2010『中世民衆の世界　－　村の生活と掟』岩波新書
藤沢良祐 1994「山茶碗の現状と課題」『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター